



La Mort du Cygne

1960. 6～7

上映画映解説

No. 65

白鳥の死 10巻

La Mort du Cygne

仏シナトランティカ1938年作

監督……………ジャン・ブノア＝レヴィ
原作……………ポール・モーラン
脚色…………… { ジャン・ブノア＝レヴィ
 { マリー・エプスタン
音楽…………… J・E・セファール
舞踊振付指導……………セルジュ・リファール
撮影…………… L・H・ビュレル

——キャスト——

カリーヌ……………ミア・スラヴェンスカ
ローズ・スウリ……………ジャンヌ・ジャラ
ボーブレ……………イヴェット・ショーヴィレ

(1941年5月29日邦楽座で封切)

『白鳥の死』について

飯島 正

『白鳥の死』はジャン・ブノア＝レヴィの『白鳥の死』であった。というのは、その後ブノア＝レヴィは映画史にのこるような作品をつくってはいないからである。そして2・3年まえに物故した。実をいうと戦前に彼の作品活動はすでにおわっていたといってもいい。戦争中はアメリカで軍の仕事をしていし、戦後はフランスにかえっても、短篇映画しかつくりなかった。しかし彼の戦前の作品、たとえば、『母の手』(1933)、『美しき青春』(1936)、『白鳥の死』(1938)は、フランス映画史上見のがしてはならない傑作または佳作であった。ことに『母の手』はすぐれていた。

『白鳥の死』はポール・モーランの同名の中篇小説の映画化である。モーランといえば、日本では新感覚派文学の守神として知られているが、この小説は初期の派手な作品とはちがってわりに地味なものである。だが、ブノアレ＝ヴィは、さらにそれを大分改作して

シナリオにした。

モーランの小説では、ソヴェトの踊り子がパリのオペラ座にのりこんで、そのロシア的な狂暴さで、オペラ座のロココ的風景をかきみだす点に特色があったがブノアレ＝ヴィは、これをオペラ座のバレエ学校の先生と女の子たちの話にした。

ロシアの踊り子カリーヌ(ミア・スラヴェンスカ)が、パリのオペラ座に出演する。従来のスターであったボーブレ(イヴェット・ショーヴィレ)はその王座から追われることになった。彼女をくお母ちゃん>としてしたうローズ(ジャンヌ・ジャラ)は、彼女に同情するあまり、『白鳥の死』の稽古のとき、舞台の床板を一部分はずれるようにして、カリーヌに怪我をさせた。だが、舞台に立てなくなったカリーヌは、教師としてローズにバレエをおしえているうちに、ローズの才能を見ぬき、特別に目をかける。ローズもまた彼女を愛するようになる。一方ボーブレは、ローズが彼女のためにしたことなどにはおかまいなしに、さっさと結婚してしまったので、ローズは絶望的になり、また犯罪の発覚をおそれて、地下の下水道にはいりこむ。だが最後には、みんなにとらえられ、真相を告白し、立派なバレリーナになることをちかかって、映画はおわる。

モーランの原作では、ローズがボーブレに自分のしたことを打ち明け、ボーブレのスターの地位をすくったことをよこぶところでおわっているが、ブノアレ＝ヴィはそこで真相を打ちあけさせず、カリーヌとローズの愛情の芽ばえ、ボーブレの結婚、ローズの自殺未遂等のエピソードをつくわえた。それだけ少女の同性愛を強調しているわけだが、これはぼくの考えでは、トーキー初期の同性愛の映画『制服の処女』(ドイツ映画、レオンティネ・ザガン監督、1931)の成功が、ここまで尾をひいているためではないかとおもう。同時にまたブノアレ＝ヴィが、『母の手』では子供の集団生活『美しき青春』では医科大学生の集団生活をえがいているように、ここでもバレリーナ志願の

少女集団生活をえがいているので、単なる流行とはちがったブノアレ＝ヴィの好尚もここにあらわれていて、そういう描写がまた作品の基調にもなっているのであった。

また、ブノアレ＝ヴィには、教育的な態度も多分にあり、大人と子供という問題を、この作者はつねに考えている。その証拠には、第2次世界大戦中のアメリカ時代からフランスでなくなる生前まで、彼は映画教育や教育映画にもっとも力をいれて働いていた事実をあげることができる。

ともあれ、ブノアレ＝ヴィの作品は、これにかぎらず、つねに誠実な愛情の問題をとりあつかっている。『母の手』では、託児所につとめている女(マドレーヌ・ルノー)の献身的な仕事をえがいたし、『美しき青春』では、女子医学生(マドレーヌ・ルノー)が、おなじ医学生(ジャン＝ルイ・パロー)と恋仲になり、子までなしたが、男が自殺したので、その後いかに彼女が生きぬかねばならないかを、作者は誠意をこめて考えた。これにくらべると、『白鳥の死』の物語は、ロマンチックな要素がおおいが、それでもなお作者は愛情のありかたについて、見るひとと一緒に親身になって考えている。ロマンチズムだけではかたづけられないものがある。

一般的にいって、この映画の魅力はまずバレエ場面にあるがミア・スラヴェンスカはたしかユーゴスラヴィアのバレリーナだったとおもうイヴェット・ショーヴィレはフランスでも一流のバレリーナで、いまでも活躍をつづけているらしい。先日パリの新聞を見ていたところが、なつかしいその名がのっていた。

国立近代美術館フィルムライブラリー